

第16回年次大会（滋賀）と新体制の出発

会長 森 孝晴

今年の大会は大きな節目の大会となりました。15年にわたり会長職を務められ大変ご尽力をいただいた辻井会長が勇退され、このことに伴って役員体制が大きく改められたからです。

6月14日（土）の午後、とても立派な立命館大学びわこ・くさつキャンパスのエポック21を会場に70人を超える参加者を得て行われた今回の大会は、いつものように辻井会長のあいさつ、内野研究・企画部長の司会で始まりましたが、総会の最後に新組織案が提案され賛成多数で承認されたことで新体制がスタートしたのでした。辻井会長は名誉会長に、内野研究・企画部長は顧問に、副会長には運営委員の山田國男氏が、新しい運営委員には鹿児島支部の鎌田京子氏がそれぞれ就任されました。

運営委員の星野妙子氏（京都支部）と高橋潤子氏（鹿児島支部）には留任していただきましたので、以上のような陣容で協会の今後の運営に力を尽くしてまいります。会員の皆様におかれましてはどうかこれまでと変わらぬご支援をお願い申し上げます。

さて、大会は、総会後の研究発表に入り、内野信幸氏がロンドン、クレイン、ドライバーを比較した発表を展開され、芳川敏博氏がロンドンの闘争と現代的意義について話してくださいました。締めくくりに登場したのは、われらが辻井会長で、会長としては最後になる講演「J. ロンドン晩年の地と彼の死について」をしていただきました。どれも大会にふさわしい質の高いものでした。大成功に終わった今回の大会を開催するためにご尽力いただきました辻井会長をはじめ立命館大学の関係者の皆様、ご協力いただいた京都支部の会員の皆様、研究発表をしていただいたお二人、御参加いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

ロンドンや文学を取り巻く環境は、協会が発足した15年前とは大きく変化しました。この15年間で大学の文学部は激減し、文学のゼミや授業を取る学生も減る一方です。長引く景気低迷や生活の困難の中で、実用的な技術や知識ばかりが取り上げられ、小説は外国の古典を中心に絶版が増えています。こうした状況は協会にとっても危機であることはこれまでも折に触れ指摘してきたところです。そんな時期に剛腕の辻井名誉会長とは対照的な私が会長になったのですから、辻井氏でなくとも心配になるでしょう。

でも、皆さんの努力のおかげでここ何年も会員数は100人前後で安定しています。また、活動の方も派手さはありませんが、支部読書会活動、エッセイ集の発行、会誌の発行、主催旅行の実施など、着実に歩んでいます。ロンドンの現代的意義については今や多くの人々が認めるところまで来ています。今年私が指導している大学院生は、ロン

ドンについての修士論文を執筆中ですし、手前みそではありますが、鹿児島とロンドンにはいくつも縁があることが地元では少しずつ知られるようになってきています。新しい本部・事務局は私の勤める鹿児島国際大学に置かせていただくことになりましたので、地元でも大いにロンドンを広めていこうと張り切っております。

私の夢としましては、とりあえず今の会員数を維持し、現在の活動を継続し充実させながら、近い将来、支部読書会を増やしたり、研究誌を発行したりできたらと考えております。しかし現在は引き継ぎだけでふうふう言っていますので、しばらくは辻井前会長などのお力を借りつつ安定した運営ができるように努力してまいりますので、どうか寛容なお心で見守っていただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

(2008/08/20)